対談

「歴史・偉人から学び、日本から未来を拓く」

～「イノベーション」と「温故知新」で和の文化を創造～

水道事業を取り巻く環境が厳しさを増す中、歴史や偉人の取り組みに学び、今後の新しい知識や道理などに展開することは重要と言える。本紙に「人・水　美しい日本のこころ」を連載執筆していただいた作家の童門冬二氏と、水の偉人、周藤彌兵衛翁の大銅像を日中戦争の激戦地・山東省で製作し、松江市八雲町に建立した小松電機産業株式会社代表取締役（一般財団法人人間自然科学研究所理事長）の小松昭夫氏にご登場いただき、「温故知新」「イノベーション」などをキーワードに、水への思いを語り合っていただいた。

出席者

作家　**童門　冬二　氏**

小松電機産業株式会社代表取締役会長
（一般財団法人人間自然科学研究所理事長）
小松　昭夫　氏

【司会】水道産業新聞社社長　西原　一裕

童門氏

小松氏

人材育成や平和・環境の貢献策とは

―本日は「温故知新」「イノベーション」の発想に基づき、水の偉人の歴史や江戸時代の日本水道史などを踏まえ、今後の人材育成、水による平和や環境への貢献策などを幅広く語り合っていただきたいと思います。

童門先生には2010年10月から今年5月まで約3年半にわたり、本紙で連載していただき、ありがとうございました。今年7月には連載に加筆した単行本も、発刊させていただきました。これらを振り返られていかがですか。

童門　私は東京在住ですが、島根県をPRする「遣島使」（ふるさと親善大使の島根県版）を、島根県知事から委嘱されています。島根県松江市には本社がある小松電機産業の小松社長と、このような対談の機会を得て、嬉しく思っています。

さて、日本には過去、中国や朝鮮半島から多くの方が渡来しました。彼らは日本国内で大きな反乱を起こしませんでしたが、それは日本の風土（水・太陽・土地など）や国民性が大きな影響を与えたからだと思っています。特に日本は水が良質かつ豊富で、古い都もほとんどが川の周辺に形成されています。これは世界文明にも共通しており、水と緑の恩恵を受けてきました。

ただ、「日本人は空気と水をタダだと思っている」と言われたように、水の重要性への意識が未だに低いのも事実です。水不足に悩む地域では海水淡水化施設を建設するなど、水は非常に大事な存在になっています。

今回の執筆を通じ、都市問題である「水道」を身近で親しみある存在として理解してもらいたいのと同時に、日本の水が他国を感動させ得る要素を含んでいることを再認識する必要があると感じました。ちなみに、2020年のオリンピックが東京に決まった一因に、治山、治水、上下水道システムの先駆けとなった「やくも水神」を、松江で生まれた世界的プログラム言語「Ｒｕｂｙ」で開発し、現在は全国360自治体、7700施設で稼働しています。通信インフラ、スマートフォンの劇的な技術革新を追い風に、10年以上の改良や検証を重ね、状況把握、遠隔操作・設定ができるようになりました。

東日本大震災をきっかけに、水管理の概念は根本から変わりました。従来の中央監視装置に比べて、広域合併や合理化での社会が創られました。ましたが、世界金融システムの異常な肥大化から、人の意識や健康にも障害が顕著になり、社会の持続が難しい状況になってきたと認識しています。

童門　その通りです。

小松　松江に縁が深い小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、「開かれた精神（ＯｐｅｎＭｉｎｄ）」が健全な社会づくりに必要不可欠と言っています。国際分業が機能しなければ、人類が生きられない時代を迎え、ハーンの精神と出雲神話、イノベーションを組み合わせ、未来を拓くことを構想しています。

偉人の考えや思想踏まえ社会活性化

童門　私が歴史小説の執筆を志すようになったのは、小学生の時の歴史教育に端を発しています。出雲神話が題材でしたが、一般の話としてとらえると、よく理解できたことを覚えています。ところで、小松社長の座右の銘は「中庸」とお聞きしていますが…。

小松　堺屋太一氏がＮＨＫの番組で「城の天守閣に住んだのは織田信長のみで、『中庸』という掛軸を掛けていた」と話されていました。不思議に思いましたが、信長の置かれた状況と時代背景、目指したものを研究資料を見せていただくと、何か新しい日本の精神と技術を構築した「和魂和才」というような気がします。

小松　ありがとうございます。核拡散や国際分業の時代を背景に、日本は終戦記念日を積極的にいかし、「人類の戦争を終わらせる使命がある」と言い切ることから、「和の文化」が始まると思います。このほど、17歳のマララさんがノーベル平和賞を受賞しましたが、彼女が「これは始まり」と話したことは、たくさんの方に大きな力を与えたと思います。

なお、周藤翁と、没後100周年事業（ウィーン）でご縁をいただいた、女性初のノーベル平和賞受賞者であるベルタ・フォン・ズットナー女史（1843～1914）の志を蘇らせ、教養や芸術、技術革新をユーモアでつむいだシンポジウム「出雲から陽が昇る」を、11月23日に松江市で開催します。

―平成26年度日本水道協会全国会議（第85回総会・水道研究発表会）の開催地である名古屋市は、先見の明で水量が豊富な木曽川の表流水を水源とし、その恩恵を受けています。これらを踏まえ、歴史・偉人から学ぶ人材育成、水が歴史に果たしてきた役割などについて、童門先生はお願いできますでしょうか。

童門　武田信玄は経済を「乱れた世の中を正し（経）、苦しんでいる民を救うこと（済）」ととらえ、信玄堤に代表される治水工事を積極的に行いました。

また、家臣が話を聞く態度を「口を開けている」「笑っている」顔を見ないと、「途中で退出する」の4つに分け、短所があるからといって排除せず、現代社会にも通じますね。

童門　両方とも水に縁がありますよね。武田信玄は治水の前提として、治山の重要性を踏まえ、浸透機能に優れた落葉樹を積極的に植えたようです。

小松　南北に長く、暖流に挟まれ、水河期が短かった火山列島の日本は、台風の通り道でもあることから、落葉樹の種類が世界で1番多く、飲料水に適した良質な軟水に恵まれています。戦後、植林が全国的に行われましたが、歴史と地政学に学ぶ治山治水の視点が弱かったような気がします。

水への尊敬の念や情報の取捨選択を

―最後に水をキーワードとした今後の方向性・期待などをお願いできますでしょうか。

小松　水に関しては、「水を制する者は天下を制す」（中国・禹公）「水五訓」（王陽明・黒田如水）が知られています。地球規模での災害が続発していますが、劇的な進化を続ける電波の雲「クラウド」とスマートフォンで、「水の情報、平和のプラットフォーム」を構築する動きが、官民連携で始まることを願っています。

童門　水が持つ底力を尊敬することが不可欠です。今日の情報化社会で、失われがちな根気や継続性を自然水から謙虚に学ぶ姿勢が大事です。また、情報もきちんとした1つの物差しを持って、取捨選択していかなければなりません。それを先導者や有識者が規範として、示していただけるとありがたいですね。

―長時間にわたり、示唆に富んだ話をしていただき、本日はありがとうございました。

8月1日に行われた周藤彌兵衛翁の銅像建立・除幕式

水が歴史に果たしてきた役割など

―やはり、偉人の取り組みや言動には目を見張るものがありますね。

童門　明治維新後の国是は「和魂洋才」でした。つまり、日本の精神を忘れずに、西洋からの優れた学問・知識を摂取し、活用すべきという意味です。小松電機産業の会社も、仕事にやりがいを持ち、自分を奮い立たせる金を自分のために使うのがケチ、世の中のために使うのが倹約」と考えました。役立つと思えば、投資を惜しまない姿勢は、小松社長に似ていますよね。

小松　私の故郷である八雲村が輩出した出雲和紙の人間国宝、安部榮四郎氏の座右の銘が「道」です。置かれている現状を正面から受け止め、イノベーションで「経営の美学・道」を追究し、経営理念の実現を目指して今日に至っています。

童門　いずれにしても、近江商人の松居遊見のことを思い出しました。彼は「余った金は、点線を実線化していく努力が求められます。それが社会全体の活性化などにつながると思います。

小松　そうですね。私は人類、日本人、そして出雲人です。この立場の追究から、生きる目的を見い出し、「シートシャッター門番」「やくも水神」「研究所事業」の3つの目標を定め、相乗効果が期待できる道を模索してきました。

マズロー5段階説の上位概念「自己超越実現」を、空海の生き様を踏まえ、朝鮮半島の対岸に、故郷と会社の本社と島根原発があることや、広島・長崎の原爆投下、福島原発の事故、島根県制定の「竹島の日」が、私に大きな影響を与えたと思います

―やはり、偉人の取り組みや言動には目を見張るものがありますね。

童門　明治維新後の国是は「和魂洋才」でした。つまり、日本の精神を忘れずに、西洋からの優れた学問・知識を摂取し、活用すべきという意味です。小松電機産業の会社

高目標実現へ努力重要…童門
開かれた精神が不可欠…小松

周藤彌兵衛翁が安山岩を開削して切り通しを完成させた現場

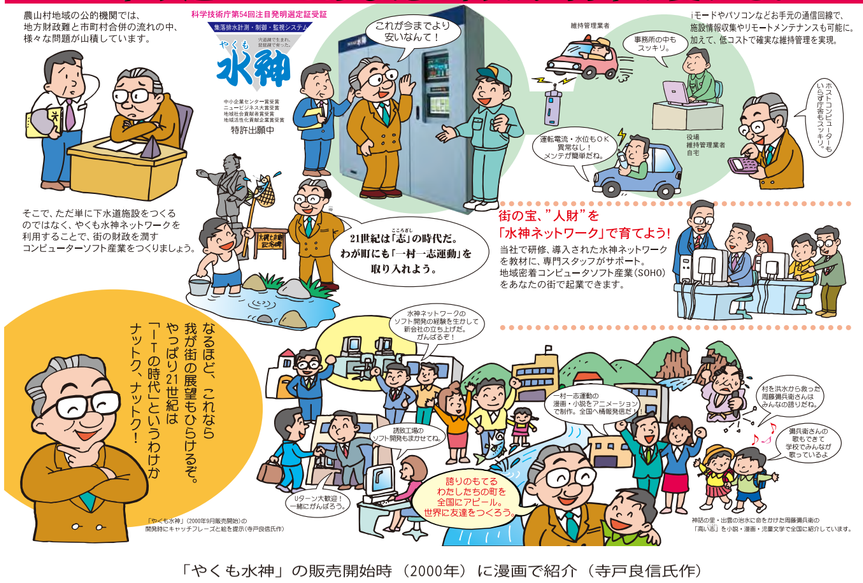
童門　織田信長は天下を「守」閣でなく、天「主」閣と称し、自らを神と崇めていたようです。織田信長の出身地である尾張国は現在の愛知県で、その語源は万葉集にも歌われている「あゆち」つまり「海から吹いてくる幸福の風」のことで、熱田神宮周辺を理想郷とする「あゆち思想」につながると考えています。

この思想を全国に広めることが、織田信長の天下取りの意義だったのではないでしょうか。小松電機産業も経営理念などに基づき、営業展開されていると思いますが…。

小松　当社は1973年2月、人口3800人の島根県八雲村（現・松江市八雲町）で、ポンプの修理業として創業しました。松下幸之助翁が提唱された「ダム式経営」に徹し、「シートシャッター門番」と「やくも水神」の2つの市場を創りました。

社是「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」、経営理念「おもろおかしくたのしくゆかいに」、行動指針「三方良し後利」を定め、社会、歴史問題を正面からとらえ、事業で得た収益で人間自然科学研究所を運営しています。

童門　御社の社是

8月1日に行われた周藤彌兵衛翁の銅像建立・除幕式

建設費・維持管理費を大幅削減
上下水道のITであなたの街が、日本が変わる。